

ことば

前号（87号）から始まった新連載“本誌のこだわり用語”を読まれての感想はいかがでしょうか？前号では“物質”、今号では“害反応”を取り上げました。他のメディアではお目にかかることの少ない用語を使用している意味をご理解ください。

最近読んだ「ことばの教育を問いなおす—国語・英語の現在と未来」（ちくま新書）の中で、国語学者の荻谷夏子は、“抽象的な言葉を前にすると思考や判断の停止が起きやすい。正しそうで権威のある言葉であればあるほど、安心し油断して、その言葉を生煮えのまま呑み込んでしまう（中略）。やさしい言葉で言えないことは、本当はわかっていないことかもしれません。”と述べています。

“本誌のこだわり用語”は、正しくて権威のありそうな“治験薬”、“副作用”などの言葉を前に、思考や判断を停止していないか、今一度立ち止まり、熟考するための連載だといえましょう。

先に触れた新書で引用されていた柳父^{やなぶ あきら}章の「翻訳語を読む—異文化コミュニケーションの明暗」（光芒社）によれば、“文字を持たなかった日本に入ってきた漢字は、舶来品であり、新しい意味の言葉は漢字で造語されることが多かった。”とされています。したがって、明治以降に欧米から輸入された近代医療に関する言葉も、ほとんどが漢字で表されました（もっとも近年では、そのままのカタカナ表記が増えてはいますが、例：インフォームド・コンセント）。英語（またはドイツ語）を漢字に置き換える際に、元の言葉の意味とは等価でないものになってしまうことがしばしばあるようです。したがって、医療に関する論文等で、当たり前のように使われている用語ひとつひとつについて、原語に立ち返って、その本来の意味を理解する必要があるようです。

さらに、医療の専門家や役人たちが自分たちに都合のよい意識をすることが多いことにも注意する必要がありそうです。87号の“物質”で取り上げた New Products の訳が「新薬」となるのもその好例でしょう。

新連載を契機に、医学情報を読む際には、用語に注意していただけるようになれば幸いです。